◎中学生の部

その他の良い作品

ゆかり

西中学校　二年
柏瀬　有花

文学というと
固苦しいイメージがあるが
私はこの夏
桶川市にある「さいたま文学館」を訪れた
ここに行くのは二度目だ
一度目は、小学校五年生の時
私の通う小学校の校歌を作詞した
宮澤章二の企画展を見に行った
体育館にかかげられた校歌
いつも目にしていた作詞家の名にひかれ
さいたま文学館を訪れると
宮澤章二の生い立ちや作品を知れた
テレビで目にしたことのある
「行為の意味」や
誰もが知る「ジングルベル」の歌詞
市内の多くの校歌を作った宮澤章二が
私の住む羽生市の出身であることに
誇らしさを感じた
二度目の今回訪れたのは
埼玉県に縁のある文学者たちの作品展が
開催されていたためだ
教科書でよく目にする文学者たちも
出身や執筆活動、作品の中で
埼玉に縁を多く持つことを知った
羽生を舞台に「田舎教師」の作品を書いた
偉大な文学者たちの縁を知ることで
ふるさとと文学を身近に
感じることとなった。

ヒマワリ

東中学校　三年
金子　彩佳

今年も、ばあちゃんと一緒にお墓参り。ばあちゃんが一生懸命育てたヒマワリの花とキレイな水と共にお供えする。そして、お線香をあげる。

そこで、ばあちゃんが一つつぶやく。

「じーちゃんが元気でけーってこれますよーに。」

私は涙があふれそうになった。じいちゃんは今、入院していて、しばらく帰ってくることは難しい状況だ。

だから余計に涙が出てくる。

お線香の香りがただよってきた。

近所の人たちも、お墓参りに来たのだ。

「こんにちは。今年も暑いねー。」

今年もまた、長話が続く…。

これが私のふるさとのよいところ

近所の人は皆、仲がよい。

羽生弁で話すたび、

ヒマワリのような笑顔が溢れ出す。

私のふるさとがここでよかった。

祖父の野菜畑

東中学校　二年
木村　光

ぼくの家の裏には
祖父の野菜畑がある
毎日大事に育てている

そこには
季節ごとの
色々な野菜が育っている。
なす、トマト、ピーマン、オクラ、
かぼちゃ、冬瓜、苦瓜、大根
白菜、玉ねぎ、じゃがいもなど
沢山の野菜を作っている

ぼくは
その旬の野菜を食べている
それは
とても新鮮です。
その中で一番好きな野菜は
トウモロコシだ
甘くてとてもおいしい
食べると夏を感じる。

今年もトウモロコシの季節が
やって来た
ゆでたてのトウモロコシを
今年もほおばる
「うまい、夏が来た」
と感じる
「おじいちゃん来年も作ってね」
と言うと
「あいよ」
と返事が返って来た

ぼくは
幸せな気持ちになる。

私の青春

東中学校　一年
木宮　実羽

暑い
七月の太陽は
夏休みではしゃぐ小学生のようだ
そんな照りつける日差しの中私達は
今までの練習をホールにぶつけに
ひたすら自転車をこいでいた…。

吹奏楽部

中学校に入学したばかりのころは
なんて楽しそうな部活なんだろうと思った
好きな楽器になって曲を上手に吹いて…
なんて現実はそんなに甘くはなかった
楽器を吹けるようになるのにひと苦労
まして曲なんて
パッと吹けるようになるわけなかった
何日も何日も同じところを吹いて
やっとできるようになったと思えば
またできないところがでてきて
そのくり返し
そんな中コンクールがあると知った
先輩との初めての大舞台
絶対出たい！と言う気持ちでいっぱいだった
練習して練習して練習して…
そして今私は先輩達と自転車をこいでいる
大好きな先輩達と
大好きな羽生のホールで演奏できる
その喜びを今かみしめている
今この場所にいること
今羽生で生きていることを
私は誇りに思おう
さぁ　やるぞ！

「かえる」

東中学校　三年
窪寺　紗弥香

みんなかえる　どこにかえる
めぐりめぐり　水はかえる
天から山へ　山から川へ　川から海へ
長い旅して　水はかえる

みんなかえる　どこかにかえる
楽しいことも　辛いことも
悔しいことも　嬉しいことも
経験となって　自分にかえる
好き嫌いの感情も　怒りと悲しみの感情も
言葉にできない混じりあった感情も
人と出会って　広がって
声にだして　伝わって
形となって　暗い場所から
心にかえる

みんなかえる　私もかえる
雨上がりの静かな場所へ
祭りのような賑やかな場所へ

青々とした緑の中へ
これからという先が暗い道へ
私を育んだ全てのふるさとへ
私はかえる

バレーが夏

南中学校　二年
小磯　百萌

夏が来ると思い出す
心身に響きわたるあの声が
仲間の熱気で破裂しそうなあの場所が
いつも手をさしのべてくれるあの人の姿が
光り輝く汗は
私たちを照らしている
ゆっくりと一つのボールが落ちたとき
笛の音が響きわたったとき
私の夏は終わっていく
その音はまだ聞こえていない
光り輝く汗が
私たちの舞台へ道のりを
造り上げている最中なのだから
仲間と共に
南中の体育館と共に
必死にボールを追いかけ続ける
先輩の背中を追いかけ続ける
夏は始まったばかりだ
私のふるさとには色がある。

ふるさとの色

西中学校　二年
五月女　紗也

空の色、土の色、雲の色、ふるさとには、
たくさんの色がある。

春の空は、うすい水色がキレイで、
夏の空は、白ひとつない青色が輝いて、
秋の空は、夕やけの赤色がまぶしくて、
冬の空は、銀世界のように白く美しかった。

小学校の校庭の土の色は、晴れるとうすい
だいだい色になり、雨が降ると、濃い茶色
になる。そんなあたりまえのことを土の色
私に教えてくれた。

雲の色は、私と似ていた。
空にねずみいろの雲がかかると、私の心にも
空にねずみ色の雲がかかった。
空に白色の雲がかかると、私の心は、白くて
キレイになれた気がした。

そして、私の大好きなふるさとの色は、
「藍の色」だ。
藍はキレイで、美しくて、色があざやかで
どんな色にも負けない、私のふるさとの色
であり、ふるさとが愛する、
「藍の色」だ。

なんじゃもんじゃの木

東中学校　三年
鈴木　愛理菜

「いってきまーす。」
「いってらっしゃーい。気をつけてね。」
毎日母はこう言って見送ってくれる
学校に着くと
「おはよう。今日も頑張ろうね。」
と私に言ってくれるもうひとりの母
それは、中庭にある
「なんじゃもんじゃの木」
なんじゃもんじゃの木とはヒトツバタゴという国の天然記念物に指定されている貴重な樹木で、東中のシンボルとなっている。
この木と初めて出逢ったのは入学式の日だ
期待と不安で緊張していた私になんじゃもんじゃの木は
「大丈夫だよ。これからよろしくね。」
と優しく語りかけてくれた。
この日から私が学校生活で悲しい時、落ち込んだ時、嬉しい時、楽しい時
なんじゃもんじゃの木も一緒に泣いたり
笑ったり、時には励まして元気づけてくれた
そんななんじゃもんじゃの木は私にとって
もうひとりの母のような存在だ。
残りわずかな中学生生活を
なんじゃもんじゃの木と一緒に
大切に過ごしていきたい。
「これからもよろしくお願いします。」

私の通学路

東中学校　一年
冨永　晴日

「いってきます」
あわてて自転車に乗り
ペダルをこぎ出す
朝日がまぶしい
思わず目を細める

ビューービュー
自転車で　風を切る音

チュンチュン　ジリジリ
あちこちから聞こえてくる
小鳥のさえずり　セミの鳴き声

サラサラサラ　ゴホッ
用水路を流れる　水の音

サワサワサワ
サワサワサワ
田んぼのいねが

海の波のように
音を立てて　ゆれている
「きれいだな」と心の中でつぶやく
ここが私の一番好きな場所

信号が一つも無い　田んぼ道
自然豊かな　私の通学路

中学校が見えてきた
今日もいつもと同じ
おだやかな一日が　始まる

私の通学路

南中学校　一年
渡辺　陽菜

少しぬれているしばふをふみしめる
いってきます
その一言と同時にペダルをこぎ始める
いつもの通学路
道が雨にぬれて光っている
車が水たまりをはねとばす
草のにおいが風に乗って私に届く
かえるがないている
風が青々とした稲をくすぐっていく
青空が私をつつみこむ
学校の門が見える
いつもと同じ通学路
見あきたはずなのに
なぜか
鼻歌がこぼれる